

---

# 伊庭探偵事務所事件ファイル

緑一色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伊庭探偵事務所事件ファイル

### 【Nコード】

N0940P

### 【作者名】

緑一色

### 【あらすじ】

私こと小鳥遊<sup>たかなし</sup>ひよりは伊庭探偵事務所なる場所にアルバイトに来た。

そこで私を待ち受けていたのは・・・全体的に適当な所長、機械オタクの少年、所長曰く戦闘要員の荒っぽい性格の少女。

私はどうすれば良いのだろう・・・

## プロローグ

看守の藤田敬は薄暗い死刑囚独房を靴音を響かせながら歩いていた。現在時刻午前1時30分、ほとんどの死刑囚はもう寝静まっている。昔は死刑囚を監視するための見回りだったが監視カメラという便利な物が出来てからこの見回りはほとんど無意味である。そんなことを考えながら敬は独房の覗き穴から中の様子を確認している。

305・・・異常なし、306・・・異常なし、307・・・

「ん？」

敬は布団の上に座り込んでいる307号室の住人に少し大きめの声で呼び掛けた。

「おい、もう消灯だ。早く寝ろ」

そう言うと、その囚人はビクツと肩を震わせ、耳をふさぎ込み叫んだ。

「やめろー！！音が・・・音が」

敬はその声に驚きつつも返した。

「五月蠅いぞ！隣が起きるだろ。とつとと寝ろ」

「うるさいのはお前だ！！」

そう言って囚人は引き出しから何かを出し、自分の手首を切った。

敬の視界が真っ赤になる。

「うわっ」

敬は小さく悲鳴を上げ、自分の顔を一瞬抑えた。そして、自分の両手の感触に恐怖し、恐る恐る両手を覗き込む。そこにはどんな凄腕の画家でも出せないような赤が塗られていた。

敬はすぐに異常を察知し、無線の電源を入れ、大声でまくし立てる。

「こちら藤田！！307号室で異常発生！！繰り返す。こちら・・・」

## プロローグ（後書き）

テスト期間中に書いてしまった・・・。  
しかも新作

## 伊庭探偵事務所（1）

私は目の前にそびえ立つ3階建ての雑居ビルを見上げた。そして、ため息をついた。

どうしてこんなことになったのだろう。

始まりは2日前だった。

私はある理由でアルバイトをすることを決め、求人誌をパラパラとめくり一つのバイトに目が留った。

「探偵をしてみませんか？ 勤務時間5時間　日給2万円」

勤務時間が5時間で日給が2万！？ 私はその額に驚愕して疑うということを考えなかった。

そして、現在に至る。

「1階、スナックとみこ・・・2階、雀荘テンパイ」

3階伊庭探偵事務所・・・どう考えても怪しい。よくよく考えればおかしかった。

電話一本で即採用だったし、履歴書もいらない。どう考えてもまともな仕事とは思えない。

お父さん、お母さん。今まで私を育ててくれてありがとう。私は駄目な娘です。

私はどうすれば何事も無く帰れるかを考えながら重い足取りで階段を登った。そして、ドアの前で立ち尽くした。

「やっぱり裸の写真とか撮られるのかな・・・あるいは」

いや、ここから先は考えたくない。私は気持ちを落ち着けてドアを開けた。

「こんにちは！！この前、連絡をいただいた小鳥遊たかなしひよりといいいます！！」

斜め45°に頭を下げる。そして、そおと顔を上げた。

「・・・」

そこには2人の男と1人の女がいた。

まず、ごちゃごちゃと散らかっている机の上に足を乗せてマンガを読んでいる若い男。その隣にあるテレビで煙草をフカシながらレースゲームをしている私と同年代くらいの少年。そして、それをぼっと見ているこれまた私と同年代くらいの少女。どう見ても写真を撮ったり危ないビデオを作ったりする人達とは結びつかない。

すると、少女が私に気付いた。

「修、お客さんだよー」

少女はマンガを読んでいる男に呼び掛けた。

「んー」

「だから客だって」

「んー」

少女はしびれを切らし、台所に置いてある包丁を男に投げつけた。

「えっ？」

包丁はきれいな直線を描き、男の呼んでいるマンガに突き刺さった。

男はヒツと短い悲鳴を上げて、マンガを落とした。

「なっ、何すんだ！！真子！！」

「客だって言ってるでしょ！！」

「一体、ここ何！！」

しまった。私もつられて叫んでしまった。

## 伊庭探偵事務所（2）

私は男に促されてソファに座っている。テーブルを挟んで向かい側には先ほどの3人。「」「・・・」

誰ひとりとして話を切り出そうとしない。無論、私もである。一体、何分くらい経ったのだろう。

5分？10分？私にはとても長い時間に感じた。

そして、沈黙を打ち破ったのは意外にも先ほどのいざこざに見向きもしなかったゲームをしていた少年だった。

「とりあえず、この人誰？」

さっき大声で名乗っただろうが！！・・・あつ、誰も聞いてなかったのか。少しショック。

私は仕方なくもう一度名乗った。

「先日、連絡をいただいた小鳥遊ひよりです」

すると、若い男が思い出したかのように返した。

「あー、あの時のバイトの子か。こんなに若いとは思ってなかったよ。」

俺はこの事務所の所長の伊庭修いばおさむね」

そう言って所長は笑いかけてきた。私も引きつった笑顔で微笑み返す。

身長は175cmくらいだろうか。体型は細めで、一番の特徴はクルンとはねた前髪だろう。

すると所長の右隣の少女も自己紹介を始めた。

「あたしは一応、秘書の花田真子はなだまこ。よろしく」

そう言って真子は私に握手を求めてきた。私も素直に応じる。

真子の髪型はショートボブで茶髪。この寒い季節に半袖のTシャツに丈が膝までしかないジーンズといった出で立ちだ。

そして、最後の一人も同じ要領で自己紹介を始めた。

「情報分析の腕を買われた黒井遼次くろいりやうじだ。よろしく」

遼次は女の私と同じくらいの背丈だろうか。眼鏡をかけているのでパツと見、優等生といった感じた。

遼次の紹介が終わると所長が話し始めた。

「まあ、こんな感じか。えーと、じゃあ小鳥遊さん」

「はい」

「仕事内容は広告通り探偵の仕事をやってもらうんだが・・・何かそういうのの経験ってある？」

いや、普通ないでしょ。

「ありません」

「まあ、当然か・・・じゃあ、聞き込みをやってもらおうわ」

聞き込み？ 刑事ドラマとかでよくやってるあれのことだろうか？ 突然言われても困る。

「君、けっこうかわいい顔つきだし向いてるよ」

素直にうれしかった。16の少女に「かわいい」は一撃必殺のストレートみたいなものだ。まあ、仕事は所長が教えてくれるだろう・・・あれ？ 何でボクシングで例えたんだろう？

「こっちのメスゴリラじゃ、相手が怖がって聞き込み出来ないしさ。ちようど、欲しかったんだよ。君みたいな人材」

「誰がメスゴリラだって？」

「いや、今のは戦闘要員として頑張ってほしいという意味で」

「所長の生存率17%か」

「おい、遼次！ リアルな数字を出すな！ 怖す・・・」  
パーン

所長の言葉が終わらないうちに真子の平手打ちが所長の頬を抉った。叩いたんじゃないかって決ったってところがミソね。

所長はソファから転がり落ちた。

その時だった。バンという音と共にドアが勢いよく開いた。

「修ちゃん！！ 新しい依頼ー！！」

見るとチャイナ服を着た色っぽい女性が紙を持って立っている。その時の私のストレートな意見



やっぱこころ危ない!!

### 伊庭探偵事務所（3）（前書き）

ミステリでしかもまだ全然進んでないのですがこの時期は受験シーズンでどうしても・・・。

今月、来月はほとんど更新は無いと思っています。ご了承ください。そうしていただけるとこちらも気が楽なので・・・。

### 伊庭探偵事務所（3）

そう言つてチャイナ服の女性は倒れ込んでいる所長に向かってダイブした。

所長は寝返りをうち、それをかわした。女性は床とキスをする羽目になった。

「その修ちゃんはやめろ。香織」

「いいじゃない。だって修ちゃん可愛いんだもん」

香織と呼ばれた女性は服の汚れを払いながらそう言つて、所長にウインクした。

私は所長に聞いた。

「あの・・・この人は？」

「ああ、家内の香織。こいつが依頼持つてくるから」

「そうですか・・・ん？」

カナイ？

「ええーっ！！所長さん結婚してたんですか！？」

「ひよりちゃん、いいよ。こんな奴に『所長さん』なんて。普通に修でいいよ」

いつの間にか私も『ひよりちゃん』だし。

「お前らな。世の中には上下関係って物があるんだぞ」

「「じゃあ仕事辞める」」

遼次と真子はきれいなハーモニ―を奏でた。所長は何も言い返せなかったのでは？が悪そうに妻に助けを求めた。

「で、香織。依頼は？」

どうせ猫探しとか浮気調査とかそんなのだろう。私はそうたかをくくっていた。

それが間違いだと気付くのは少し先のお話。

「えっと・・・片方は真子ちゃんの出番ね」

「よし来たー！！」

真子はそう言って小さくガツポーズをした。鬱陶しそうな顔で遠次が聞いた。

「もう片方は？」

「まあ、真子ちゃんにまずは暴れてもらいましょう」  
暴れる？何だか嫌な予感が……。

「ここって確か……」

「雀荘テンパイだ」

そう。私達の移動先はこの雑居ビルの2階の雀荘テンパイ。入口からもう危険な香りが漂っている。

そんなことお構いなしに所長はバンと扉を開ける。

中には一代のジャン卓を囲んでいる4人の客と店員2人だけだった。……ん？違う。奥にもう1人香織と似たような格好の女性がいる。

「そこのお兄さん達！！うちのユリちゃんを返してちょうだい」

香織さんが高圧的にそう言い放つ。男4人はゆっくりと立ち上がりこちらに歩み寄ってきた。

ああ、やっぱりこの人達ヤの字の人たちだ。人相でわかる。

「ユリちゃんは支部長がずいぶんと気にいったから買ったんだよ。お姉さん」

「うちは奴隷市場じゃなくてスナックなのよ。それに私はあなた達のためを思って言ってるのよ」

なるほど。それで合点がいった。つまり、香織さんは下のスナックとみこで働いているって訳だ。

しかし、これからどうするつもりなのだろう？

「真子ちゃん。もういいわよ」

香織さんはため息をつき、後ろに下がった。入れ替わりに真子が前に出てくる。

「だから、香織さん。あそこはもはやスナックじゃなくてガールズバーだって。そういう名前にすれば、こういう人たちは絶対少なくなるよ」

「あら、こういう人たちはむしろガールズバーに来るらしいわよ」

「へー、そうなんですか・・・」

その時には真子は男達の目の前に立っていた。ニヤリと笑い真子は男達に聞いた。

「後悔しない？」

「何だあ？まさか、この小娘が俺達の相手・・・」

そう言いかけた男の顔面に真子の飛び蹴りがヒットした。男は最後まで台詞を言い終える事無く倒れた。一瞬、男たちは何が起きたのか分からなかったのだと思う。

真子がもう一人の男を左ストレートでK.Oしたのを見て流石に理解した。

だが、結局は反応できず二人とも数秒後には床に沈んでいた。

「ふう・・・なんか消化不良起こしそう」

私は何故真子が戦闘要員なのか理解した。

## 伊庭探偵事務所（4）（前書き）

皆さんお久しぶりです。

やっと事件が出てきましたよW  
W

## 伊庭探偵事務所（４）

私たちは事務所に戻った。

香織さんは後片付けやら何やらで忙しいと言って、テンパイに残ったしかし、私はさっきの香織さんの電話の内容が忘れられない。

「もしもーし、伊庭でーす。うん、そう。伊庭香織。悪いんだけどタケっちに変わってくれない？えっ？そうそう。警視總監の。ちょっとゴキブリを４匹ほど始末してほしくて。あつ、こっちの話だから・・・」

今さらながら私は伊庭香織という人物に恐怖した。一瞬、彼女の友人関係を尋ねたかったが怖くなってやめた。

「さて、それじゃ依頼内容を確認しますか」

そう言って所長は香織さんから手渡された依頼書をソファに座って読み始めた。

私、真子、遼次も後ろから覗き込んだ。

「えー、依頼主は根岸美沙子さん、５４歳、内容は死刑囚の息子の無実を証明すること。報酬は６００万か」

・・・はあ？何で探偵事務所にそんな依頼が来てるの！？

「いつもより面倒くさそうじゃん」

そりゃそうだ！！

「でも、あの鰐の事件ほどじゃないな」

何ですか！？鰐の事件って！！

「あー、あれはきつかった」

私は慌てた口調で尋ねた。

「あの一、ここは一体どんな事件を扱ってるの？修さん」

私は真子も遼次もため口だったので合わせた。まあ、流石に呼び捨てにはしないけど。

所長は一瞬、嫌そうな顔をしたがすぐに答えた。

「ああ、俺の家内が色々な業界とコネがあってね。まあ、結構この

事務所は有名なんだよ」

やっぱりそうか。私は先ほどの一件でそんな依頼を持ってくるのはあの人しかいないと睨んでいたがその通りだった。そして、所長は続ける。

「結構表沙汰に出来ない無茶な依頼も多いんだよ。一応、『どんなことでも1ヶ月以内に解決!』が宣伝文句だから」

何か一ヶ月以内ってところが妙にリアル。そこがウリなのかもしれないけど。

真子が所長に尋ねた。

「んじゃ、人員はどうすんの？」

「そうだな。じゃ、ひよりちゃん、悪いけど初っ端から聞き込みやつてもらおうわ」

「うえっ!?!いきなり?」

「そう。で、遼次はいつも通り情報収集」

「了解」

すると、真子が目を輝かせて聞く。

「あたしは? あたしは?」

「デスクワークだ」

途端に真子はがっくりと肩を落とし、ため息を一つ。そして、ソファにもたれかかった。

「すまんね。新人に突然仕事押しつけちゃって」

全く謝ってる感じがしないのだけど・・・。

まあ、新人だから仕方ないのかな。私は渋々返事をした。

「うん、でも私全然やり方とか知らないよ?」

「それは明日説明するさ」

私は少し安心した。だが、まだ問題がある。私がそれを切り出そうとした時だった。

「それとこの事務所は自由に使っていいよ。帰る家無いようだから寝床にしてもいい」

「なっ、何でそれを!?!」



「いや、仕事上見つけることは得意だからさ」

その通り。私は中学を卒業してすぐにこの地にやってきた。

今までは友達のマンションに厄介になっていたが、迷惑になるだろうと思い、そこも出て行った。しかし、手元にはマンションを借りる金など無かった。

「じゃ、今日は解散。一応ここは風呂もあるし。ベッドは無いがソファにでも寝てくれ」

そう言って私以外の全員は事務所から出て行った。

## 初仕事（1）

私は現在、伊庭探偵事務所から電車で2時間＋徒歩24分の旅を終えてとある刑事施設に来ていた。

そこは死刑囚が拘留されている場所だからなのか何とも言えない重々しい雰囲気放っている。

私はレンガ造りの壁を辿って施設内へと続く扉を見つけた。

そこで、受付の初老の女性に話しかけた。

「すみません」

「はい」

女性にはこやかな笑みを返してくれた。

「根岸隆彦さんに面会したいのですが・・・」

「――約4時間前――」

私は久々にまとも（といってもソファだが）なところで寝たからかなり寝覚めはよかった。携帯の時計を見ると、時間は7時25分。

「・・・そういえば何時から仕事なんだろう？」

我ながら全く考えずに行動していた。

とりあえず、着替えをして朝食作りにでも取り掛かろう。幸いここはトースターもあるしトーストと何か適当に作ることに決めた。

私は100円均一の無地のTシャツの上からジャケットを羽織り、ロングスカートを穿いた。

次に昨夜持ってきたリュックサックの中からパンを1枚取り出し、トースターに入れる。

さて、あとは冷蔵庫でも漁って・・・

「・・・」

私は絶句した。冷蔵庫の中には目薬と卵<sup>キッチンテーブル</sup>しかない。冷凍庫、野菜室共に空っぽである。

仕方ない。目玉焼きとトーストで我慢するか。

食事を終えたタイミングで所長が来た。

「おはようございます」

「おはよう」

所長はコートをソファに置いて、私の食事場所<sup>キッチンテーブル</sup>に来た。しばしの沈黙ののち私は昨日の質問をぶつけてみた。

「何で私がホームレスってことが分かったの？」

「ホームレスだったのか？」

「いや・・・まあ似たようなものだけど」

「まあ、一番に目についたのは靴かな」

「靴？」

「簡単だよ。バイト先にあんな泥だらけの靴で来る奴がいるか？俺だったら頭を疑う。でも、ひよりちゃんはその恰好で来た」

いつの間にか所長までひよりちゃんになってるし。真子の呼び方が移ったんだろうな。

そして、所長は続ける。

「と、くれば何らかの理由で靴を洗えない人物ということになるからさ。こちら辺、ホームレスの規制が厳しいから公園の水道すらあまり使えないからね。かと言って、大きな川も近くにない」

「なるほど」

「極めつけは昨日着てたフリースのポケット」

「ポケット？何で？」

「昨日はポケットがパンパンになるまで何かを入れてたよね？」

「うん」

「俺はそれをコインロッカーの鍵と睨んだ。まず、君の靴は汚れてはいたがそんなに使い込まれた感が無かった。これはつい最近まで

まともな生活をしていた証拠だ。靴を買い替えられるくらいのこと。つまり、ひよりちゃんはマンションとかを借りる程の金はないが、そこそこの金があった。で、ホームレス生活で一番金を付けなければならぬのは何かを考えた。そう、荷物だ」

すごい。まるで私の人生を見てきたかのような口ぶりだ。そして、所長は締めくくった。

「ひよりちゃんは今までの荷物を全部コインロッカーに預けた。違うかな？」

私は驚愕して思わず拍手をしてしまった。

「凄い！！たった僅かな情報でそこまで」

所長は少し照れた様子で頭を掻いた。そして、話題を転換した。

「それで仕事なんだけど」

「あつ、説明さえしてくれれば」

「実は俺、依頼人の方に聞き込みに行かなきゃならないからさ。これ読んで仕事してくれない？」

ええ・・・そんな突然。

私は渋々聞き込みのやり方が箇条書きされている紙を見た。そして、一つの疑問が頭をよぎった。

「あの・・・今回の場所って」

「ああ、交通費渡すわ」

良かった。これで自腹だったら私の生活が危うい。給料も今日の仕事が終わってからだし。

所長が手渡した封筒には一万円札が一枚入っていた。

往復4000円程度のはずなのに。私はこの時初めて所長の優しさに感激した。

私が必要な物を持って出ていこうとした時だった。所長が私を呼びとめた。

「ちなみに帰ってきたらデスクワークがあるから」

「うえっ！？だって5時間で2万円じゃ？」

「良く見なって。5時間ゝって書いてあるだろ。必要に応じてそれ以上働いてもらう場合もそりゃあるよ」

私は平然とした顔でそう言う所長の顔を殴りたい衝動を抑えて事務所を後にした。

天国から地獄に落とされた。そんな気分。

## 初仕事（2）（前書き）

何か短いんですけどこれは仕様ですので悪しからず

## 初仕事（2）

面会室で待つ事10分。未だに根岸隆彦は来ない。擦りガラスを隔てた向かい側の刑務官が欠伸をする。ちなみに、面会の許可は伊庭香織の名前を出すとすぐにここに通された。彼女は本当に何者なのだろうか。

私の視界に写る真正面のドアが開き、赤いジャージに緑のズボン、ぼさぼさ髪で無精ひげを生やした中年の男が刑務官に連れられて向かい側の部屋に現れた。これが多分根岸だろう。

その刑務官と入れ替わりで先ほど欠伸をしていた刑務官は部屋から出て行った。

根岸が椅子に座りこんだのを見て、私は聞き込みの鉄則を思い出した。

（とにかくこちらが先に話を切り出すべし）

「こんにちは。私は小鳥遊びよりと言います」

向こうはきょとんとした顔で私を見据えてきた。まあ、当然の反応かな。

「伊庭探偵事務所というところから来ました。あなたの無実を証明しに」

（こちらが必要な情報以外は漏らすな）

これも聞き込みの鉄則ね。

根岸は益々訳が分からないと言った感じで尋ねてきた。

「どうということだ？」

・・・どうということって言われても。

「あなたのお母さんから依頼があり、その内容が息子の無実の証明

だったんです」

「そうか。やはり、母さんは最後まで俺の味方だったんだ。・・・  
母さん」

根岸は泣き出してしまった。えっと、どうすればいいの？

私はこっそりジャケットのポケットに隠してあったメモを見た。  
こんな状況を打破できるものなどないと思ったが探せば意外とある  
ものだ。

（相手が感情的になっている時は沈黙）

5分もしない内に根岸は泣きやんだ。私はそのタイミングで話を戻  
した。

「あなたのことを調べました。本当にこんな事を？」

「ああ、確かに俺がやった」

うーん。認めちゃってるよ。

そして、根岸は続けた。

「だがな！！あいつらは罪深い人間だったんだ。死んで当然だ」

「えっ、あっ、と・・・」

私はつい言い淀んでしまった。どうやら、この人は自分の行いを正  
しいと思っているらしい。てか、無実を証明するのにあなたが犯罪  
を認めてるなら意味無いじゃん！

私はその迫力に圧倒されてしまい、その日の面会時間は大した事を  
聞けなかった。

「どうしよ。全然、話聞けなかった・・・」

私は監獄の前で一人嘆いた。

そして、他にやることも無いので電車に揺られ、ブルーモードで自  
宅（事務所）に帰るのであった。



## 初仕事(3)

「はあ、もうかったるいな」

真子がそう言って項垂れている。あいつは本当に筋肉馬鹿だ。女なのに。

「そう言うな。あと何枚だ？」

「37枚」

「スタートは？」

「43枚」

3時間やって6枚かよ……。俺は思わずため息をついた。

「てかさ、こんなことやっても意味なくない？修が過去の事件振り返ってるの見たことないよ？」

真子の愚痴が始まった。まあ、新入りが来るって理由だけで過去の事件の始末書を書けっつのも殺生な話だが。

真子は俺達が今まで手掛けたおよそ50の事件のうちの43枚の始末書を悲鳴を上げながら書いている。(ちなみに俺は4枚)

というのも今までは真子が聞き込み役をやっていたのだが相手の態度が少しでも気に喰わないと相手を叩きのめしている。そう考えると43枚は妥当か。

俺は一つのネットの記事に目がいった。

『恐怖！！母子を殺した殺人鬼の動機！うるさかったから・・・』まあ、記事と言っても週刊誌の特集記事をそのまま貼りつけただけの簡素なものだが。

「って、リョーチン話聞してる？」

思わず俺は椅子から転げ落ちそうになった。

「何だそりゃ？」

「えっ、遼次だからリョーチン。新しいメンバー入ってきたから呼称変えようかなって」

そんなことで？

「拒否権は？」

「ない」

「だろうな」

俺は苦笑しながらとりあえずこの記事を印刷した。印刷した記事を真子が興味深げに拾い上げ、目を通し始める。

「これがその死刑囚の事件？へー、結構ひどいことするね。G県T市で公園を散歩中の母子をナイフで何度も刺して殺害。放心状態のところを警察が容疑者の身柄を確保。動機はうるさかったから・・・」

「それはただの週刊誌の記事。大した情報源じゃない」

俺は今度は掲示板を探した。たいていこういう事件の裏情報はどこかの掲示板に都市伝説よろしく転がっている。

香織さんの情報だけを当てにはできない。

もつともこっちの情報も当然、根も葉もない噂ばかりだが。

「・・・見つけた」

## 初仕事（4）

午後4時42分。私は自宅であり職場である場所に帰還した。中では所長達3人が目を輝かせて私を待っていた。

「お帰り」

真子が真っ先に私に声をかける。

とりあえず私も「ただいま」と返しておく。

「で、どうだった？」

前言撤回。

遼次だけはまるで生ごみを見つめているかのような視線を私に浴びせてきている。

私はしどろもどろになりながらも結果を報告する。

「えっと、根岸さんは自分が殺した事を認めてて・・・そ、それで・

・・・」

「「「それで？」」」

「え・・・駅弁が美味しかったな。また食べたいな」

事務所内は水を打ったように静まり返った。3人の視線が痛い。

やめろ。そんな目で私を見るな。

ああ・・・穴があるなら入って蓋したい・・・。

「じゃあひよりちゃんの情報は本人の告白だけか」

所長はそう言って紙にその旨を写した。その紙をみて遼次が口を挟んだ。

「でも、初日にしては結構集まったな」

「まあな。でも問題はこれから。まずはひよりちゃんもこの紙を」  
所長は私に紙を手渡した。

そこには事件の概要と以下の事が箇条書きで書かれていた。

・異常聴覚の持ち主の可能性有り

- ・それは普段は使えない
- ・解くには隆彦さんの暗示を解く
- ・誰かが意図的に解いた可能性有り
- ・暗示の事を知っているのは母親と友人数人のみ
- ・暗示の解き方を知っているのは上に同じ
- ・隆彦さん本人は自白している

「暗示ってどういう事？」

「俺も詳しくは今日だけじゃ分からなかったけど、母親が言うには彼の異常聴覚はトラウマみたいなものらしくふとしたきっかけで異常聴覚が現れるらしくてね」

「へー」

そこで不服そうに真子が異議を唱えた。

「でも、そんなの嘘かもしれないじゃん」

「犯人が異常聴覚って推理の方が面白いだろう？」

そう言った所長の横顔を見て私はゾクツとした（ドキッではない）。その横顔は子供の様な無垢な笑みに見せつつも心の奥底に何か得体のしれない物をしまいこんでいる。

そんな笑みだった。

こんな笑い方が出来る人間がこの世にいるのだろうか？

私はいるとは思えない。だが目の前にいるのが現実だ。

「明日も同じように動くぞ。それと真子、その始末書明日までだからな」

「えー！！修の鬼！！」

「包丁を上司に投げつけるような女には言われたくないな」  
そう言って所長は出て行った。

続いて遼次もパソコンの電源を切り、無言で出て行った。

さて、私も朝所長に言われたごちゃごちゃした面倒な書類を片付けなければ。

そう思って自分の机に座ろうと思い動き始めた時。

真子がまだ残っている事に気付いた。

「真子は帰らないの？」

「残業してく」

「どこで？」

「ここしかないでしょ」

「え・・・あ、そう」

しまった。よくよく考えればこの事務所は設備が良すぎる。これは残業の為だったんだ！！

今頃気づくとは私も本当に馬鹿だ・・・。

「まあいいや！いよりちゃんとも仲良くなりたかったからちようどいい。うん、2人で頑張ろう」

ハハハと笑いながら輝く真子の両目に私は恐怖した。

## 初仕事（5）（前書き）

何か本格ミステリとか言いつつこの章は結構邪道なことに気付いた・  
・・。

まあこれはこれで有りかな。

次の章は結構本格だと思えます

## 初仕事(5)

P M 9 .. 4 0

どうしてこうなった？私は思い返してみる。だが、どれだけ思い返しても真子が100%悪い。

「ひよりちゃんどう？」

「あと・・・17枚かな」

「そう。悪いね手伝わせちゃって」

いや、そこまでは正直予想していた。

でも、何で私が真子の筆跡を真似て始末書を書いているのに彼女はテレビでバラエティ番組を観てるの！？

――1時間後――

「よし、じゃあ交代」

「はあ・・・」

実質的に真子の仕事はたった3枚の始末書のみとなった。残り14枚は全て私。

もう駄目だ。疲れた。風呂入って早く寝よう。

私が動き出そうとした時だった。

「ひよりちゃんは家族いる？」

真子の唐突な質問に私は思わず足を止めた。

「まあ、田舎に」

「そっか。・・・ちよつと身の上話聞いてくれない？ふと思い出しちゃってさ」

「私でいいなら」

ちよつと興味を持った私は真子と向かい合う形でソファに座った。真子は猫背で始末書を書き続けながら淡々と話し始めた。

「あたしはこの辺で産まれた。まあ、どこにでもある普通の家族だった。金持ちでも貧乏でも無く。あたしには姉が居てさ。どうしようもないボンクラのあたしよりずっと出来の良い姉ちゃんだった（・・・）。だからか親からの愛情は均等には感じられなかった。5・5・4・5って感じの比率。有る時、あたしは本当に親から愛情を貰ってるのか気になって家出した。何も言わずにね」

そこで真子は少し間を置いてから続けた。

「そしたら両親は警察に任せて何もしなかったんだけど・・・姉ちゃんはあたしを街中探し回ってくれたんだ。その日は雨が凄くてさ・・・でも、強い雨の中姉ちゃんはあたしを探して何時間も駆け回った。それが原因でね・・・10歳だった姉ちゃんは・・・」

「・・・」

まさかそんなに重い話だったなんて・・・私まで気分が滅入ってきた。

「続き聞く？」

「うん」

「姉ちゃんを失って初めてあたしは両親に聞かされた。あたしと姉ちゃんは子供の出来なかった両親の養子だったってこと。今思えば不自然なことばかりだったんだよね。4歳以前のあたしと6歳以前の姉ちゃんの写真も無かったし」

くっくくくと真子は笑った。

だが、それは嬉しい時に出るような無意識な笑い声ではなく、悲しい時にわざとやせ我慢して出る意識の感じられる笑い声だった。

「それからあたしの両親は変わった。姉ちゃんがいる前と言葉とか態度とかは変わらなかったんだけど、どこかそれは演技の様にあた



しには見えた。ちょうどその頃かなー、修の所にバイトに誘われたのは」

真子の歳は18。私より1つ年上だ。

なので、私は敬語で話そうと思ったが本人が堅苦しいのが嫌いらしく嫌がられたので普通に話している。

ということは最高で3年前からこの仕事に関わっているということになる。

私もちょうど1年前、家を出た。私の場合はもっと軽い理由だった。

でも、私は彼女の話に妙に身近に感じられた。

「どしたのひよりちゃん？ぼおっとしてるけど」

「えっ。あ、いやごめん。大したことじゃないから気にしないで」

「こんな話し聞かせてこっちこそごめんね。結局あたしを愛してくれる人は少なくともこの世界にはいないわけね」

「それは違う！！」

私はつい大声で叫んでしまった。でも、今の言葉は聞き捨てられない。

真子は私をおとしやかで物静かな女の子とも思っていたのだろう。

口を開けて啞然としている。私は構わず続けた。

「きっとお母さんもお父さんもお姉さんが亡くなったから娘との接し方が分からないだけよ」

真子は憤慨して私の胸倉を掴み上げた。

「分かった様な口聞かないで」

「分かる。私は真子と違って両親に愛されて生きてきたから。だから、子を愛してない親なんて絶対にいないってことが分かる」

真子のビンタが私の右頬に当たった。口の中に鉄の味が広がって

く。

どこか切ったのかな。

「いくらひよりちゃんでもそれは許せない」

「それが演技に見えるのはきつと真子だけよ。あなたは人を信じられなくなったからそういう捻た考えでしか物事を見れないの。もつと真っ直ぐ現実を見なさい!!」

私は年上に子供を叱りつけるように話してしまった。

バツが悪くなり風呂に向かおうとした時、真子がぼそりと呟いた。

「明日にでも帰ってみる・・・一週間ぶりに」

私はわざと何も言わずに風呂場に向かって歩を進めた。

## あまりに荒唐無稽な・・・(1)

私の新居での生活2日目。

昨日と同じように着替えを済ませ朝食のトーストを食べ終えた。

今日最初に来たのは遼次だった。

「おはよ」

「・・・」

遼次は返事もせずにパソコンへと向かった。

私は後ろから画面を覗き込んだ。デスクトップには画面の3分の2がアイコンで埋め尽くされている。インターネットのアイコン以外は何か訳の分からないプログラムみたいだ。

「何か用か？」

「いや、用って訳じゃないけど」

遼次は私に目も向けずに忙しそうにタイプを行い、次々とページが現れては消える。

「分かってやってるの？」

「こうしないとファイアウォールが破れない」

「ふあいあうおーる？」

遼次は私の問いには答えてくれなかった。

遼次がEnterキーを押すと何かの資料のようなものが映った。

「何これ？」

鬱陶しそうにしながらも今度は答えてくれた。

「警察の捜査資料」

「警察！？」

遼次はそれ以上の説明をせずに、また忙しくタイプを始めた。

それを呆氣にとられて見ていた私は今日の仕事を思い出し、事務所を出た。

今日は昨日とは違う人に会いに行くらしい。何でも三沢一樹<sup>みさわかずき</sup>という人らしい。

しかし・・・

「遼次って何であんなに私に対して冷たいんだろう？・・・まあ頑張って仲良くなろう」

私はそう呟き駅へと向かった。

「おはよー。ってリョーチンだけか」

あたしはカバンをソファへと投げた。

「何か楽しい事でもあったか？」

やっぱり遼次にはすぐにバレちゃうか。まあ、隠しても仕方ないし話そう。

「実は昨日ひよりちゃんに説得されちゃってね。ちょっと親に会ってきた」

遼次は目を丸くして驚いている。うん、予想通りの反応。

「で、何でそれで楽しそうにしてるんだ？」

「ま、何ていうかね。久しぶりに人の温かさに触れた気がした」  
ちよっと臭いかな。言ったあとじゃ無駄だけどね。

すると、遼次は煙草を咥え火を点けた。

一服してから怒気を含んだ声であたしに話しかけた。

「お前も所長もあの新人に感化されすぎだ」

「えー、駄目なの？」

あたしは当然抗議した。

「いくら人手不足とは言え、所長もあんなのを使うのがそもそも間違いだ。で、真子もあいつに何を言われたのか知らないが良く考えしてみる。素性も何もかも一切不明の女が突然、職場に現れたんだ。誰だって馴染めねえよ」

「少なくともあたしと修は馴染んでるし」

遼次はため息をついてまたパソコンと睨めっこを始めた。

どうにも遼次は人間不信なところがあるな。うん、改善してやらないと。

とりあえずまずは始末書を終わらせよう。

あたしは自分のデスクの上の山積みの始末書に目を向けた。

あまりに荒唐無稽な・・・(1)(後書き)

ちよつと短くなってしまった・・・  
すいません

## あまりに荒唐無稽な・・・(2)

私は昨日と同じように電車に乗って三沢一樹の元へと向かった。

余談だがここにきてようやく所長が私に1万円も渡してくれた理由が分かった。

私が事務所を出て少ししてから所長から下のようなメールが届いた。

「昨日渡したお金の余りで今日はここに行つてね」

というメッセージと共に地図が添付されていた。

私は文末に付いているニコニコ笑っている顔の絵文字に腹を立てることはこれより前にもこれから先にも無いだろう。

地図を見ながら歩いていき、辿り着いたのは工事現場だった。

入口には7階建ての高層ビルが建てられるとの旨が書かれていた。

中へ入ると耳をつんざく程のドリルが何かを削る音と現場の主任らしき人物が怒鳴っている声しか聞こえない。

「何か御用ですか？」

作業服姿の男が警戒しながらも尋ねてきた。

「あつ、私は伊庭探偵事務所の小鳥遊ひよりという者ですが」

「探偵？ 若いのに偉いね」

男は意地悪く笑いながら私を上から下まで舐め回すように見つめる。やっぱ探偵というのはこういうものなんだね。

小説や2時間ドラマのようにはいかないということが身に染みた。

「三沢一樹さんお願いします」

「一樹か。おい、一樹！」

男は数m先で作業をしている男を呼んだ。

多分呼ばれた男が三沢一樹なのだろう。

一樹は頭に白いタオルを巻いて作業をしていた。服装はやはり青の

作業服。

まだ中年と呼ぶには若すぎるくらい元気がありそうだ。  
いや、昨日見た根岸隆彦と比べてしまうからだろうか？  
そんな事を考えているうちに一樹はこちらに来ていた。

「何ですか？」

「探偵さんがお話があるそうだ。プレハブに案内してやれ」

「探偵が？・・・まあ良いですけど」

一樹は私に着いてくるように指示した。

私は素直に従い、一樹の後ろを着いていった。

一樹は私をプレハブに連れて行くとパイプ椅子に座るように促した。  
私が座ると一樹もすぐに座った。

「伊庭探偵事務所の小鳥遊びよりというものです」

「三沢一樹です。職業は見ての通りです。ハハハッ」

とりあえずお互いの自己紹介は終わった。

「少しお話を聞かせてくれませんか？」

アポ無しだったので私はダメ元で聞いてみた。

「あまり長い時間を取らないなら」

よし、とりあえずここまではOK。問題は話をどこから切り出した  
ら良いものか・・・。

私は少し思案した後話し始めた。

「根岸隆彦についてですが」

「隆彦・・・ですか？」

一樹は嫌そうな顔をして俯いた。そして、続ける。

「あいつの何を話せば？」



「では、まずあなたは隆彦さんと面会して何か変わった事とかは気付きましたか？」

「うーん。最近は月に1度会うか会わないかだったからな。特に変わった様子は」

「そうですか。では隆彦さんは自分の罪を認めてましたか？」

「そこまでもう知ってるんですか……。はい、あの親子を殺したことを反省していました」

「では根本的な事ですがあなたと隆彦さんとの関係は？」

「ただの腐れ縁ですよ。仲は良いです」

「それだけ仲が良いなら隆彦さんの異常聴覚のことは知ってますよね？」

流石にこの質問には黙り込んでしまった。

聞くの早すぎたかな……。しかし、一樹は答えてくれた。

「探偵さんは彼の暗示の解き方は知ってますか？」

「いえ」

「そうですか。・・・小4の時でした。俺と隆彦と仲のいい友人がもう1人いたんですけど、俺がぶざけて隆彦の暗示を解いちゃったんですよ。すると、突然暴れ出して……。それ以来隆彦は特別教室で授業を受けることになりました。俺は当然何度も謝ったんですけど、隆彦は気にしなくて良いって……。俺のせいで精神は至って平常な友人の人生を狂わせてしまったんです」

話し終えると一樹は申し訳なさそうな顔をした。

「まあ、教室が変わろうともその3人で仲良くやってたんですけどね。多分、今回の自殺未遂も何かの拍子で暗示が解かれちゃったんだと思います」

「その解き方を教えてくれませんか？」

一樹は黙って首を横に振った。

「じゃあ解き方を知っている人物は？」

「御両親と俺、それとさっき言った友人の高浜美保。たかはまみほ 誰に聞いても無駄だと思いますけどね」

「そうですか。一応、その人の連絡先を教えてください」

私は一樹にシャープペンシルを手渡した。一樹はメモ帳に高浜美保の住所と電話番号を書いてくれた。

立ち去ろうとする一樹に私は一つ聞き忘れた事を思い出した。

「すみません、もう一つだけ」

一樹は鬱陶しそうに「何ですか？」と返した。

「隆彦さんはあなたに何かを贈りませんでしたか？」

「あのですね。刑務所の管理は厳しいんですよ。下手すりゃ物品どころか情報まで制限されちゃいます。何も貰ってませんよ」  
不機嫌そうに一樹はそう言ってプレハブから出て行った。

### あまりに荒唐無稽な・・・(3)

またこの男は来た。

確かに依頼をしたのは私だがこの伊庭修と名乗る男はどうにも不気味で好きになれない。

いつもスーツを着こなしニコニコ笑っている。

その笑みが崩れるところを私は見た事がない。

「すいませんね。何度も」

「いえ、構いませんよ。どうぞ」

私は修に家にかかるよう促した。

だが、修は微動だにせずに返した。

「今日はそんなに時間を取りません。ここで結構です」

「あっ・・・そうですか」

私は玄関に戻った。

「聞きたい事は1つ。暗示の解き方を知っているのはあなただけですか？」

私は驚愕した。確かに隆彦の暗示の事は話した。

でも、何で暗示を私以外にも知っている人がいるということが!?

私は出来るだけ動揺を隠しながら答えた。

「いいえ、他にもいます」

「そうですか。ありがとうございます」

「えっ、あのその人たちの名前は教えなくても?」

「優秀な部下を持ちましたから。ではこの辺で。必ず息子さんの無実は証明しますの」

そう言うと修は去って行った。

修の携帯が着信を告げる。

「もしもし？」

「あ、修ちゃん？こっちが出来る事は全部したわよ」

「ああ、ありがとう。香織」

「で、事件の秘密だけど・・・どうやら被害者の内の母親の方は精神障害を持っていたみたい」

「精神障害？」

「うん。父親と離婚したのが原因でね。もちろん娘は3歳だから何のストレスも感じてなかったみたいだけど」

「・・・と、言うと」

「真相が分かったの？」

「・・・あまりに荒唐無稽な推理だが、聞くか？」

「当たり前じゃない。いくらでも聞いてあげる」

私は修さんの推理が書かれたメールを見て狼狽した。  
こんなことって・・・本当にあるの？

思わず私は一樹に教えてもらった暗示の解き方を知っている隆彦の友人の高浜美保にカフェで話を聞いている事すら忘れていた。

カフェではジャズが流れており客も変な時間帯を指定したからかまばらだ。

「あの・・・」

「あっ、すいません。つい」

美保の髪色は黒で髪型はストレート。眼鏡をかけており落ち着きのある女性だ。

とても30代後半には見えない。

仕事の途中だったのか黒のスーツにスカート姿である。

私はちよつと懂れている。

「では続きをお願いします」

「ええ。で、その時に彼の暗示をいたずらで解いたのは一樹くんだったんです」

「動機とか分かりますか？」

「いえ。多分本当に大した理由は無かったと思います」

「そうですか」

「で、突然彼が叫びながら周りの花瓶とかを壊し始めて、私が彼を止めようとしたら突き飛ばされて・・・その先に割れた花瓶があったから」

そう言って美保は私に左腕の袖をまくって見せた。

そこには痛々しい刃物でつけられたような傷跡が残っていた。

「ではあなたは隆彦さんを恨んでいるんですか？」

「いえ、そうじゃなきゃ何度も面会には行きませんよ」

「面会はどのくらいのペースで？」

「いつも一樹さんと一緒に行っていました」

ここで私の悪い癖が出てしまった。

「それは一樹さんとは友達以上の関係ってことですか？」

美保は机を叩き、静かな声で反論した。

「それとこれとは別問題です。これ以上聞くなならプライバシーの侵害で訴えますよ？」

しまった。怒らせちゃった。こんな時は・・・。

私は必死にこういう状況のの対処法を思い出そうとした。

「～相手が怒りだしたら一度退く～」

よしこれだ。

「すいませんでした。では今日はこの辺で」

私は逃げるようにカフェを出た。というよりも逃げたに近い。

カフェから少し離れた場所で私はさっきの情報をメモ帳にまとめた。ふと空を見上げると陽が大分傾いていた。

「さて、今日はここまでかな」

私は小さく伸びをしてカールのかかった髪をかき上げて駅へと歩き出した。

あまりに荒唐無稽な・・・（４）

事務所に戻った私は真っ先に所長にあの推理について聞こうとしたが、所長は居らず真子は昨日と同じ態勢で始末書を書いており、遼次は休憩中なのかコーヒーを啜っている。

「ひよりちゃんお帰り〜」

「ただいま・・・？」

「・・・」

やっぱり遼次は何も言ってくれなかった。  
何で？私が何をしたっていうの？

「ほら、遼次も」

そう言っただけで真子は遼次を肘で突いた。

遼次はやつと口を開いた。

「何が目的だ？」

「へっ？」

「だからこんなところに何しに来た？」

・・・えっと、どういうことって言われても。

「ただのバイトだけど」

「ここの秘密を探りに来たのか？或いは所長でも脅しに来たか？言えよ」

「ちよっと！やめなよりョーチン」

真子がすかさず遼次を止めに入るが遼次は喋るのを止めようとしな  
い。

「そもそもこんなところにバイトが来るってのがおかしいんだよ。

日給2万円だなんて言葉につられて来るのは馬鹿しかいねーよ」  
すいません。その馬鹿です。

「とっと言ったらどうだ？」

だから何を・・・。

「えっ、あっ、えっと、あの、あー」

頭がこんがらがってきた。

どういうこと？言えって何？目的って何？

この秘密？もうとっくに知ってるよ。香織さん以上の秘密があるとは思えない。

脅す？そんな度胸は私には無い。

「お腹空かない？」

シーンと辺りは静まり返った。

仕方ないじゃん。遼次は訳わかんないこと言いだすし、何かこの空気に耐えきれなくなってきたし……。

って、誰に言い訳してるんだろう？

「アハハハハハハ」

遼次は突然高らかに笑い始めた。やっぱり良く分からない人だ。と思ったら真子まで小さく笑っていた。

「えっと、何だったの？」

「何でも。ただひよりちゃんが天然だったこと」

「そういうことだ。からかって悪かったな、新入り」

そう言って遼次は今まで私に一度も見せた事の無いような純粹な笑みを見せた。

全く……何で私がからかわれてるの？

天然なんかじゃない！！

するとナイスタイミングに所長が帰ってきた。

手には何かのファイルを持っている。

「よう、楽しそうじゃないか」

「修さんお帰りなさい」

「修お帰り」

「帰って来たぞ。夜の帝王が」

「最後のひどくない！？っと、それはさておき今日残業頼めるか？」



えー、またー。

いつもの真子ならそう愚痴をこぼしているだろう。

でも、今日は違う。

おそらくこの残業というのは例の推理をあの人**にぶつけに行くつもり**なのだろう。

真子と遼次は勿論私だって異議なしだ。

「良いですよ!!」

私はついテンション高めにそう言ってしまった。

**あまりに荒唐無稽な・・・(4)(後書き)**

はい、という訳で次回は解答編です。

実は作者自身今回のこの話は最初考えていたストーリーとは全く違ったものになってしまい驚いています。

では、ここでポイントの整理をしておきましょう。

幸せ絶頂にいた親子を殺したのは誰なのか？

そして、根岸隆彦の異常聴覚は本物なのか？

この2つが果たして本当に繋がるのか？

これらを見てよく考えれば自然と答えは導き出されるでしょう

## あまりに荒唐無稽な・・・(5)

面会時間などとつくに過ぎていた。

だが、そんな物は最早定番となっている伊庭香織の名前で万事解決した。

私はもちろん所長、真子、遼次の3人も真剣な表情である。

ただでさえ暗いはずの室内は夜になるとより一層暗く見えるのは何故だろう。

所長の推理通りの結末を迎えると考えたと私の心まで暗くなってしまいそうなので、考える事をやめた。

「君は・・・」

入ってきた隆彦さんは私を見て、そう呟いた。

だが、私はどうしても声を発せられなかった。

それを代弁するかのように所長が重い口を開いた。

「こんばんは。こんな夜中にお呼びしてすみません。

結論から言いましょう。あなたは本当にあの親子を殺したんですか？」

所長が小動物を虐める子供のように歪んだ笑みを浮かべたように見えた。

それは暗い室内灯が見せた幻だったのかもしれない。

私にとって、今となっては分からない話でもあるけど。

「まずは動機から話してもらいましょう」

隆彦さんは小さく笑みを浮かべて、返した。

「そんなの尋問されて何度も話しましたよ。娘の方のハーモニカが下手でね、うるさかったからナイフで刺してやりました。そしたら、母親まで騒ぎ出したのでね」

真子が今にも噛みつきそうな顔で隆彦さんを見つめている。

真子の視線など気にも留めず、狂ったように笑いながら隆彦さんは続けている。

「異常聴覚のこともあなた方はもう知ってるんでしょう？ その様子だと。あれは本当にきついですよ。現代のこの世界にはどこにでも音が溢れている。

音、音、音音音音。

そういえば、あの親子の断末魔もうるさかったですね。今思い出しても吐き気がする」

真子はついに擦りガラスがあることなど忘れたかのように隆彦さんに向かっていこうとした。

だが、私と遼次で必死にそれを止めた。

恐らく、真子をあのままにしておいたら本当に隆彦さんに殴りかかっていただろう。

そんな私達よりも平常心を保っている所長は反論した。

「随分とよく喋りますね。嘘をつく時、人は余計なことまで言うらしいですからね・・・」

私にはこの時の所長が人間以外の何か、怪物のように見えた。

それでも隆彦さんは感情を押し殺したような声で返した。

「では、あなたは どうお思いで？」

「だから、さっきから言っているようにあなたはあの親子を殺していない」

私にはどうしてもその推理が理解できなかった。

確かに状況証拠は揃っている。

あの母親は借金を苦に精神が不安定になっていた。  
病院の診断書もあった。

だが、それだけである。

だからといって何か変わるとは私には思えない。

少し怒ったような声で隆彦さんは尋ねた。

「俺が殺してないとするとなあの親子はどうして死んだんですか？」

「簡単なことです。あの親子は自殺したんですよ」

ついに所長は推理をぶつけ始めることにしたようだ。

隆彦さんは哑然としている。

まあ、誰も知らないはずの真相を探偵が知っているというのだから当然なのかも知れないけど。

所長は話を続ける。

「何故その結論に至らなかったのか自分でも不思議です。親子は外で無理心中を行い、あなたは偶然そこに居合わせてしまっただけ。多分、何箇所もある傷は彼女の精神状態のせいだったんでしょう。証拠に全ての刺し傷は腹部にありましたから」

隆彦さんは蛇に睨まれた蛙のように竦み上がっている。

口をパクパクと開けては閉めを繰り返してはいるが、肝心の言葉は出てこない。

「反論があるならどうぞ」

所長のその言葉を皮切りに隆彦さんはぼつぼつと真相を話し始めた。

## エピローグ

隆彦さんとの面会から早5日。

私は慣れた手つきでパンをトースターにセットし、卵焼き作りに入る。

卵焼きが出来上がる頃にはパンもこんがりきつね色という次第だ。

それを皿に盛りつけ、昨日の夕食の余りの煮物を冷蔵庫から出す。

「いただきます」

誰に言うわけでもなく、この一言だけは欠かさない。  
ある意味、ポリシーなのかも。

そして、食べ終わってニュースを観てる頃には所長がいの一番に事務所に到着する。

「おはよう」

「おはようございます」

所長は私に何かを投げてきた。

が、私は上手くそれを取れず、それを取り落す。

取り落してしまった為かそれはばらばらに散ってしまった。

全く……ついているんだかついてないんだか。

「えーと、片方は朝刊か。修さんありがとうございます」

所長はヒラヒラと手を振って反応した。

「もう片方は……!？」

封筒だった。

いや、ただの封筒ではない。

何故か中にはお札がぎっしり。

「そんなに驚かなくても……依頼料だよ」

「あ……そうでしたね」

「うちもボランティアではないからね」

所長はそう言って私が観てるのにも関わらず、テレビのチャンネルを勝手に変えた。



隆彦さんの証言には特に目新しいものは無かった。

隆彦さんは白昼堂々無理心中をする親子に偶然出会ってしまった。  
介抱するつもりが間違った見方をされてしまい、あえなく御用。  
警察に抗議するも異論は認められなかった。

ほとんど、所長の推理通りだった。

「というと、やっぱり異常聴覚ってのも出まかせだったんですかね  
」

「いや、それは本当だ」

えっ、それは初耳。

「あの後、俺も気になったからあいつにちょっとした実験を試してみ  
たんだよ。あいつを300m離れた場所に立たせて俺の小声で言っ  
た言葉が当てられるかって実験を試みたら、見事に当てた」

「ちなみに、何て言ったんですか？」

「・・・何も言っていない。普通は当てられない筈の答えだと思うでしょ？」

確かに。

でも、今回の件で彼の異常聴覚は何の関係もなかった。

「そういうわけでもないよ」

「えっ!？」

「普通に声に出してたよ」

「あ・・・そうだったんですか」

ちよつと恥ずかしい。

「根岸の話だと彼は直前の親子の会話はきちんと聞こえていた。その内容が、借金を苦にした自殺だったんだ。その話を元にその金融会社を警察が調べてみたら、ありとあらゆる犯罪がごろごろ出てきたらしいよ」

「へー、そうだったんですか」

「まあ、どちらにしろ彼の濡れ衣には関係ない話だったけどね」

そう言って所長は大きく伸びをした。

本当にこんな人があんな大きな事件を解決に導いたのだろうかと今でも不思議だ。

「また声に出してたよ」

今度はちょっと怒った声だった。

## エピローグ（後書き）

はい、というわけでこれにて「聞こえすぎた男」終了です。

どうでしたか？

実は今回の話、行き当たりばったりなところが多く、作品としても分かり辛いところが多々あると思います。

だって作者の俺でも分かり辛いくらいですから（苦笑）

一応、オチは異常聴覚と絡めましたが、実は全く関係がなかったという・・・

はい、かなり邪道です。

自称本格ミステリです。これじゃ。

と、思ったので次の話は本格もので行こうかと。

ちよっと内田康夫風味の伊庭探偵事務所には非ご期待ください

## プロローグ

私は時計に時々目をやってはその度に舌打ちしている。

あいつは私をこんなところに呼び出してどうするつもりなのだろう。

こんな愛知県の山奥に。

この山の正式な名前なんて知らないし覚えようとしたこともない。  
仲間内では愛知県の山と言ったら通じる。

なので、私にとってこの山の名前なんてどうでもよかった。

「・・・ったく、本当に遅いわね」

思わず私の口からあいつへの文句が零れそうになった。

だが、私の良心がその言葉を許さなかった。

もう約束の時間を10分も過ぎている。

よく友達に咲はせっかちすぎると評されたものだが、流石にこんな

ところで10分も待てる人なんてそうそう居ないんじゃないか。

友達。

嫌なことを思い出してしまった。

あの時の3人は今も7年前のことを口外しないでいるだろうか？

まあ、仮にあのことが露見しても一番ダメージが少ないのは私だ。  
それだけは変わらない。

「何にせよ今年もミステリーツアーには皆来」

ターンという花火が上がったような音がして私は思わず辺りを見渡した。

それに呼応するかのように鳥たちが一斉に飛び去って行った。

「何今の？・・・え？」

あいつは私の真後ろに立っていた。

何故か筒のようなものを持っており、筒の先からは煙が立ち昇っている。

私はゆっくりと思考を巡らせた。

あの筒は何？

そう。歴史好きの私にはすぐ分かるはずの物だった。

鉄砲。

織田信長が使い始めたと言われる武器だ。

と、いうことは先ほどの花火のような音は銃声だったんだ。

そして、その銃口が私に向けられている。

そっとお腹の辺りに手をやる。

服が生温かい液体で汚れていることが分かった。

見なくても分かる。

この液体の色はきつと赤だ。



分かった途端に体から力が抜けてきて、その場に座り込んだ。

今頃、お腹に痛みが回ってきた。

「な・・・何で？」

私の友人であり、私を呼び出した人物でもあるあいつは私の元へと歩み寄り、

「復讐」

と、一言呟いた。

全身の毛が総毛だった。

助けを呼ぶにも恐怖からか声が出ない。

携帯は圏外である。

とにかく少しでも離れるしかない。

私は蛇のように這って動き出した。

後ろであいつは何やら鉄砲を弄っている。

間違いなく次弾を装填するためだ。

逃げなくちゃ逃げなくちゃ逃げなくちゃ逃げなくちゃ逃げなくちゃ。

這う度に傷が地面に擦れて痛い。

だが、そんな悠長なことを言ってられない。

とにかく今は少しでも遠くへ。

私の必死の逃亡の意志も虚しく銃の弾補充<sup>リロード</sup>は完了した。

あいつは私に馬乗りになって、私の動きを抑えた後、私の口の中に何かを詰めた。

火薬の匂いが鼻をつく。

「んんーっ!!んんーっ!!」

ようやく出た声も口に詰められた何かのせいで意味がなくなってし

まった。

あいつはニヤニヤと笑いながら鉄砲の引き金に指をかけている。

「んんー!!」

ごめんなさい!!

私は心の中で何度もそう謝り、必死に言い訳を言った。

たとえば声は出せずとも目や鼻から流れる液体で私の気持ちはあいつにも十分伝わったと思う。

しかし、火縄の火は私の意識が途切れるまで燃え続けた。

## 歴史ミステリーツアー（1）

「すごいー!!」

私はその壮大な光景を見てつい声を上げてしまった。

そのままグルリと回り込み、それを様々な角度から観察する。

後ろで所長、真子、遼次が半ば呆れながら私を見ているがそんなことお構いなし。

今の私はもう止められない。

事の発端はこのバイトにも慣れてきた私が有給を使って旅行に行くという旨を所長に伝えた事だった。

伊庭探偵事務所は日給制なので休む場合は好きなだけ休んでいい。

勿論、幾ら休んでも良いという訳でもないが、結構その辺は緩い。

真子や遼次も都合が悪くて休んでいたし別に良いと思ってた。

「へえ。で、どこに旅行に行くの？」

所長の問いに私は得意げに答えた。

「愛知です」

「あ・・・愛知？」

所長にも表情の変化が無いわけじゃないということが今日分かった。

何故愛知なのか分からないって感じた。

「一度でいいから見たいんですよ。安土城」

「へー・・・そっか。安土城ってあの信長の？」

「はい！！安土桃山時代を生きた名将です！かつて信長は尾張の大うつけと呼ばれて馬鹿にされたりもしましたが、その奇抜な行動も相手を油断させるために行ったというかなりの切れ者でして、実際に長篠の戦いや桶狭間の戦いでも一風変わった戦術で他者を圧倒し」

「ごめん。よくわかった」

む。まだ続きは長いのだが。

遼次と真子は顔を見合わせ呟いた。

「歴女だな」

「うん。歴女」

レキシヨ？

私にはよく分からない。

すると、所長は立ち上がり、高らかに宣言した。

「よし！！じゃあ次の土曜日から3日間、伊庭探偵事務所の所員旅行を行おう！！」

・・・本当、この人は訳が分からない。

遼次と真子も「また始まったか」みたいな顔で所長を見ている。

多分前にもこんなことがあったんだろう。

「じゃあ仕事は？」

真子が仕事の心配をするなんて珍しい。

「勿論、休みだ」

その後の今日の仕事は全く手に着かなかった。

所長が遼次に愛知についてネットで調べるように命じ、調べてみる



とあれも食べたい、これも見に行きたい等の意見が沢山出て、本来の私の休みであったはずの3日の倍以上、1週間の長期旅行になったのである。

そして、本日はその初日。

電車で揺られて約6時間。

長旅の疲れなど安土城を見ただけで吹き飛んだ。

「うわー！やっぱ間近で見ると全然違う！この迫力というか何というか」

「ねえ、ひよりちゃん。飯は？」

真子から非難の声が上がった。

「そんなのまだいいじゃない！飯より城！」  
「えゝ」

真子はその場到大袈裟にへたれこんだ。

全くあれだけ筋肉馬鹿なのにへたれこむなんて情けないな。

筋肉馬鹿だからこそなのかな？

休日ということもあり、観光客は多い。

ほとんどご年配の方だけど。

その中に混じってノートパソコンに目をやっている遼次はどう考え  
ても場違い。

所長は案外普通に見学してる。

何か逆につまらない。

「いやー、こんな若い子たちも城見学に来てるとは。素晴らしい」

突然、声をかけられて私は思わず声のした方から離れた。

確か声は私の右斜め前から聞こえたはず。

そこには3人の男女のグループが居た。

1人は男性。

肌は黒く焼けており、黒のサングラスが良く似合う口髭をたくわえた中年。

1人は女性。

歳は20代くらいで髪が長く、微笑んでいる目の細い人。

1人は女性。

顔に少し小皺が刻まれており、恐らくこの中で1番高齢だろう。  
毒々しい紫を基調としたファッションセンスやパーマがかかった髪  
が彼女の年齢を高く見せている。

私にさっき声をかけたであろう男性が言葉を続ける。

「ああ、驚かせてしまったね。我々はミステリーツアーの参加者だよ。知らないかな？」

「ミステリー・・・ツアー？」

「そう。行き先が分からない旅のことだよ。  
年に何回かオフ会と称して色々な場所に行くってわけだ」

「オフ会って言っても、もうメンバーはお馴染みですけどね」

と、目の細い女性が口を挟む。

「ハハハ、それはそうだ！」

随分と豪快に笑う人だな。

私のこの男の人に対する第一印象はそれだった。

しかし、私がもっとも知りたかったことはこの人の性格とかではなく、この団体が何者かだった。

「あの・・・失礼ですがあなた方は？」

私の質問でようやく高齢の女性が口を開いた。

「私たちは歴史マニアってサイトで知り合ったんです」

歴史マニア

私はその響きに引かれてこの団体と少し話してみることにした。

「で、仲良くなったのか」

「うん。遼次、随分不機嫌だね」

「見たくもない物1時間以上も見せられてこっちは良い迷惑だ」  
「城の良さが分からないなんて遼次も子供だね」

「・・・こいつ、こんなにウザかったっけ？」

地が出始めたんじゃないの？

とは言わないけど。

大体、あたしだって遼次と同じで城の良さなんて分からない子供だ。

花より団子。

あたしはこの辺りで評判のこの店で美味しい天ぷらそばを楽しむ。

元よりこれが目当てだったし。

しばらく談笑していると、修と遼次の前にざるそば、ひよりちゃんの前に肉うどんが置かれた。

少しして、あたしにも天ぷらそばが来た。

そして、全員揃って黙々と各々の料理を口にしていた。

評判通りの美味しさだ。

あたしはやっぱり旅行に着いてきて良かったと、しみじみ思った。

ふと修がひよりちゃんに尋ねた。

「ところでさっきの人たちは何だったんだい？」

「ああ、あの人たちは歴史マニアっていうサイトのオフ会で集まったらしくてですね。

肌の黒い男の人が安田大貴さん。やすだ だいき

ちよつと年いった女の人が石井典子さん。いしいのりこ

目細い若い女の人が北田千歩さん。きただ ちほ

3人とも5年前から毎回このオフ会と称したミステリーツアーに出ているそうです」

「名前まで聞き出してくるとは凄いね、ひよりちゃん」

「え、そうですか？」

柄にもなくひよりちゃんは照れている。

まあ、名前なんて聞いてもあまり意味がないってのは黙っておこう。

「そうそう、その人たちが泊まる所が私たちが泊まるホテルと一緒に



なんですよ」

凄い縁もあったもんね。

お姉さん、びっくりだよ。

これには驚いたのか修も遼次も目をぱちくりさせていた。

## 歴史ミステリーツアー（2）

昼食の後、私たちはまた愛知の名所を心行くまで堪能した。

と言っても、楽しんでいたのは私だけみたいだったけど。

特に真子と遼次は目に見えて疲れていた。

そして、今夜私たちが泊まる旅館「木之本旅館」の一室で私たちはくつろいでいた。

「じゃあ私はもう風呂行くけど真子はどうする？」

「ん。まだスクワットと腹筋背筋が残ってるから後で」

私が真子に目をやると彼女はまだ腕立て伏せの真っ最中だった。

確か真子の夕方のメニューは逆立ち10分、腕立て200回、スクワット250回、腹筋背筋300回ずつだったからまだ時間はかかるだろう。

ちなみに彼女は朝もこれとほぼ同じのメニューをこなしている。

私は真子を置いて先に1階の温泉に向かうことにした。

ちなみに私たちが取った部屋はこの旅館の4階の2部屋。

部屋割りは当然、男女で別れた。

平日ということもあってか、結構空室が多い。

そう言えば歴史マニアの人たちは5階に部屋を取ったと言っていたから後で覗いてみよう。

1階に着くと所長にばったり会った。

彼は顔を赤くしておりタオルを首に巻いていることから恐らく今風呂をでたのだろう。

「お、ひよりちゃん。今から風呂？」

「はい。修さんは今出たところみたいですわね」

「当たり前。7時30分から夕飯だからそれまでに宴会場に来てね」

「分かりました」

宴会場……どこのことか後で確認しておかないと。

所長は私の前を通り過ぎて階段を上って行った。

まあ、まずは温泉に浸かるとしよう。

思いのほか、温泉が快適だったので1時間近く入っていたことによ  
うやく気付いた。

だって、あの温泉の種類の豊富さを見たら誰だって・・・。

「これは朝風呂は確定」

私は誰もいない廊下で一人ほくそ笑んだ。

真子はというと、私より後に温泉に入って私より先に出て行った。

それはさておき、このままだと遅刻だ。

というよりもう約束の時刻は10分も過ぎていて既に遅刻なんだけど。

それから宴会場を探すのに時間がかかって13分遅れての入室。

「遅いよひよりちゃん!!」

この宴会場は私たちと歴史マニアの人たち計11人で貸切という話は聞いていた。

その中でも一際目立つ真子が随分と気分良さげな声で私を歓迎する。

彼女の右手には・・・黄色い液体の入ったコップ。

微かに泡立っている。

「真子、それ何？」

「ん？ビール」

「・・・」

そういえば前に焼肉行った時も真子だけ酔いつぶれていたっけ。

でも、遼次はともかく所長までウーロン茶を飲んでいるのは意外だった。

その奥にはいつの間にか所長と意気投合している歴史マニアのメンバー安田さんだ。

安田さんは私に気付くとニツコリと笑いかけてきた。

「おお、ひより嬢の登場か」

「安田さーん、そのひより嬢ってのやめてくださいよ」

と、非難しつつもその呼び名は嫌いじゃない。

「いいじゃないか。僕たちは年寄りばかりだから華が無いんだよ。女性陣は姫とか奥方って感じの近寄りがたい人ばかりだから」

姫は北田さん。奥方はきつと石井さんのことだろう。

いや、奥方はもしかしたら奥の方にいるもう一人の年配の方かな？

そういえば、その人も含めて他にも知らない顔が4人ほど居る。



その様子を察してくれたのか安田さんは彼らを紹介してくれた。

「おっと、そういえばひより嬢が知らない顔も何人か居るね。  
奥に座ってる緑の服の人が奥方2号こと江崎由美子さん」

この発言で奥方は2人居るということが分かった。

江崎さんはまだ奥方1号の石井さんよりも優しそうだと私は感じた。

石井さんからは何と言うか、少しヒステリックな感じがする。

現に江崎さんは優しく微笑みながら北田さんの話を黙って聞いているのに対して、石井さんは不味そうにビールを飲みながら近寄りがない雰囲気纏っている。

「で、その隣のはしゃいでいる関西弁の子が黒木真哉くん」

黒木さんはどうやらこの中で最も若いようだが、そんなこと気にせず自分より年上の人とも普通に話している。

私には到底出来そうにない。

「で、あそこの夫婦がそれぞれ林良樹はやしよしきくんに林舞はやまいさん」

そこには楽しそうに話している夫婦の姿が。

ただし2人っきりの世界を完全に作り上げてしまっており、ある意味石井さんよりも性質タチが悪いかも。

「本当はもう一人、田中咲たなかさきっていう女の人があるはずだったんだけど、連絡がつかないんだよ」

そう言って安田さんは私の空のコップにウーロン茶を注いでくれた。

「やや、これはかたじけない」

安田さんはやはり豪快に笑った。

### 歴史ミステリーツアー（3）

宴会の後の事だった。

安田から田中咲が死んだと聞かされたのは。

とてつもなくショックだったけど、同時に恐怖も芽生えた。

咲は銃で撃ち殺されたらしい。

彼女の命を奪った弾丸は2発。

その銃弾は現在はおろか1世紀前ですら使われていないという代物だった。

私の頭に真っ先に浮かんだのは火縄銃だった。

私の人生が狂い始めたのもそれが原因だった。

私の52の誕生日の時にあの事件が起きた。

とんだ誕生日プレゼントだった。

あの事件のショックから私はノイローゼ気味になってしまっていた。

私は一時の快楽を求めてクスリに手を出し、今でも愛用している。

あれが無いとどうにも寝付けなくなってしまったから。

クスリのことばれてないのがせめてもの救いだ。

私の人生は表向きは多分幸せなものなのだと思う。

結婚はしなかったが、仕事も順調にこなし、今では退職金でこうやって趣味に生きている。

だが、どうしても私は心の底から幸せだと思えなかった。

きつと残りの2人もたとえ幸せな人生を送っているとしてもどこか

で怖がり震えているに違いない。

私ですら負い目を感じているというのにあの2人が負い目を感じないわけがない。

実行犯は私。

計画犯はあの2人。

そしてその犯罪を黙認していたのが咲だった。

ふと自分も殺されるのではないかと考えてしまった。

馬鹿らしい。

2時間ドラマじゃあるまいし連続殺人だなんて。

そう思いつつも私の酒の入ったグラスを持つ手の震えは止まらなくなっていた。

音がした。

思わずグラスを落としそうになるがすんでのところで受け止める。

私はしばらく耳を澄ませてみるが何も聞こえない。

空耳だったのだろうか。

そう思った瞬間、またコツンという小さな音がした。

何の音だろうと思った時には既にまた同じ音が外から聞こえた。

明らかに人為的なものである。

だが、扉の鍵を開けて外の様子を確認するほどの勇氣は私にはない。

もし強盗か何かだったら大変だ。

フロントに電話を試みようか？

だが、それで私の勘違いだったら恥ずかしい。

勘違いのはずは無いのだが、電話をして従業員が来るまでに外にいる人物がどこかに行ってしまったらやはり同じことだろう。

ふと私は壁に目をやった。

壁に4、5cm程の大きさの穴が開いていた。



ここから外が見れるかもしれない。

私は意を決してそっと穴を通して外を覗いてみた。

ぐっすりと眠っていた私のことを突然、真子が私の身体を揺すって夢の世界から現実へ。

「んー・・・・・・・・何？」

私の声はかなり不機嫌だけど、そんなの気にしない。

「何か聞こえなかった？ 今」

何を言い出すんだこの人は。

私が幽霊なんかの話で怖がると思ったら大間違いだぞ！

・・・・・・・・嘘です。

そういうこと言われるとめっちゃ怖くなります。

でも私はそれを真子なんかに知られたくない。

むしろ知られてたまるか。

「どんな音？」

「遠くで花火が上がるみたいな感じの」

「遠くで花火してんじゃないの？」

「こんな夜遅くに花火大会？」

「……とにかくもう寝て良い？」

「うん。……ごめん」

真子は意外と素直に布団に潜って行った。

私も寝るとしよう。

だが、目を閉じると小さいころに観たホラー映画とか夏の心霊特集番組とかの映像が頭に浮かんでくる。

「・・・・・・・・真子の馬鹿」

隣で寝る真子の布団からは微かな寝息が聞こえてきた。

今夜私は寝ないよ。

別に月の見える丘に行きたいとは思わないけどふとそんな替え歌を思い浮かべた。

が、やはり眠れなかった。

翌朝、私はせっかく寝付けたところをまたもや真子に叩き起こされた。

「ひよりちゃん、ひよりちゃん!!」

「・・・・・・・・何? ようやく寝付けたのに」

「大変なんだよ、人が死んだんだってさ」

人が死んだ？

死んだ人には悪いけど私にはどうでもよかった。

どっかの誰かさんの所為で私は家鳴りが聞こえる度にビクビクして、結局最後に時計を見た時は4時前だった。

現在時刻7時15分。

私は多く見積もっても3時間弱しか寝てない。

ナポレオンじゃないんだよ、私は。

「そんなの放っておきなよ。……おやすみ」

「だって、死んだのは歴史マニアの人なんだよ!？」

私の脳は急速に活動を始めた。

私は大急ぎで階段を駆け上り、廊下を見渡す。

人だかりの出来ている場所を見つけてそこへと向かう。

人だかりの中には安田さんもいた。

「ひより嬢!!」

安田さんが私に気付いた。

この場でその呼び方はひどく滑稽だったがそんなこと気にしている場合じゃない。

「どうしたんですか安田さん」

「それが僕にも状況がよく分からないんだ。  
いくら声をかけても石井さんが出てこないんでその穴から中を覗いてみると中で石井さんが倒れていて」

安田さんは早口でそこまで言い終えた。

この焦りようは尋常じゃない。

振り向くと所長と遼次と真子もこちらへと向かってきた。



「修さん、大変なんです！」

「ああ、人が死んでいるんだってな。ちょっとそこのボーイさん」

すると、さっきから扉を何とかして開けようとしている彼の事だろう。

ボーイは露骨に鬱陶しそうな顔で所長を見やる。

「何ですか？ 今忙しいんですよ」

人命が懸かっているのだから当然の反応だろう。

だが、所長は怯むことなく続ける。

「すみません、あとで弁償はするのでそこをどいてくれませんか」

「は？ 今扉を」

「その扉を開けるためですよ」

ボーイは渋々扉から離れた。

「真子、頼んだ」

「了解!!」

真子の跳び蹴り1発で扉は無残にも壊れた。

本来なら横開きのはずのこの扉だが、真子の蹴りで前へと蹴り倒された。

ボーイはそれを見て啞然としている。

そんなボーイに構わず、私たち伊庭探偵事務所の面々は真っ先に部屋へと入って行った。

続いて入ってこようとするボーイと歴史マニアの面々とその他の野次馬に遼次は「来るな!!」と一喝した。

実際、彼の判断は正しかった。

何故ならもし入ってきたなら顔の4分の1を削り取られ、変わり果てた姿に変わってしまったっていた石井典子の姿と肉や脳しようが飛び散っている室内を見なければならなかったからである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0940p/>

---

伊庭探偵事務所事件ファイル

2011年10月8日04時34分発行